



TITLE:

<批評・紹介>森安孝夫著「ウイグル＝マニ教史の研究」

AUTHOR(S):

梅村, 坦

CITATION:

梅村, 坦. <批評・紹介>森安孝夫著「ウイグル＝マニ教史の研究」. 東洋史研究 1994, 53(1): 167-175

ISSUE DATE:

1994-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154473>

RIGHT:

批評・紹介

森安孝夫著

ウイグル＝マニ教史の研究

梅村 坦

るによれば、北京大學の榮新江も書評を執筆したという。⁽¹⁾このように本書はすでに國際的な議論の場にのぼせられている。それは、今世紀はじめの中央アジア調査・諸発見以來、注目され研究されながら、史料僅少のため必ずしも明らかにされなかった中央アジアのマニ教の歴史とその實態について、本書が眞に検討に値する成果を生みだし、多様な言語史料を使いこなさなければならぬ中央アジア史研究の希にみる精華を見せたからにほかならない。

本書については、刊行（一九九一年八月）後、いちはやく Mario Walter（敬稱略、以下同じ）による簡潔で好意的な紹介が *Inner Asia Report, Newsletter of the Harvard Students for Inner Asia*, No. 10, Spring/Summer 1992, pp. 9-10 に掲載され、ついで吉田豊による主として言語學的立場からする詳細な建設的書評がなされた（『史學雜誌』一〇二四、一九九三年四月、一〇五一—一五頁。以下に吉田と略稱）。やゝに Antonio Forte は「本書が積極的には主張しなかったが故に抱いた疑問、すなわち西ウイグル王國はなぜマニ教から佛教へ改宗したのかについて、自らの見解として「八世紀東ウイグル時代に反中國＝反佛教のための世界宗教としてのマニ教をイデオロギーとして受け入れながら、結局はキルギズに破れたという歴史を西ウイグル王國は教訓とし、やはり中央アジアでも主流であった佛教の採用を政治的に決定したのではないか」という案を附加しながら、的確に内容を紹介しつつ高い評價を與えた書評「A New Study on Manichaeism in Central Asia」²、*OLZ* Bd. 88, Heft 2, März/April 1993, pp. 117-124（略號は「本書の引用文献目録による。以下同じ」）に發表した。また「聞くところ

きわめて論理的に構成され、用意まことに周到で學理的香やかな本書を前にして、ことにマニ教そのものに暗い評者は學ぶところが非常に大きかった。著者が「今後の更なる研究のための一つのステップに過ぎない」という本書は、自ら言うように學部ゼミ、卒業論文以來の學問蓄積の「まとめ」でもある。従來發表してきた論文の個々の成果を「繋ぎ合わせ」る中でも、森安 1985 で提示された劃期的な見解が本書の論理的主張の源泉であり機軸となっている。それは本書三頁にごく簡略にまとめてあるように、ウイグルのマニ教・佛教受容の推移すなわち中央アジアにおける兩宗教の位置づけであり、「東ウイグル可汗國時代（七四四—八四〇年）にウイグルがマニ教を受け入れ「國教」としたため「その勢力範圍でもあった」トルファン地方でも多くのトルコ語マニ經典が作られることとなったが、續く西ウイグル王國時代（九世紀後半—一三世紀）には國內の非ウイグル人佛教徒の影響を受けてウイグル人間にも徐々に佛教が浸透し、遂にはウイグル佛教がウイグル＝マニ教を驅逐するに至った」というものであった。

吉田の書評は、本書の内容と價值をかなり詳しく紹介し、また本書刊行後の最新の文献情報も豊富に盛り込んで必讀の文献となつて

いる。ここで本書をとり上げるのに、弄言して屋上屋を重ねる必要はない。したがって以下には、各章ごとに、内容の紹介については上記四點の書評にゆずってなるべく簡略にし、中世ウイグル史研究にたいして、本書に加えさらに些かなりとも資するところあることを期して、いくつかの問題について評者なりに言及し、また枝葉末節の類に属するかもしれないが、評者の氣づいた諸點を本書のよりよい理解をめざして指摘することにした。

第一章「ベゼクリク千佛洞中のマニ教寺院」

本書の手法としての價值は、文獻史料・考古學資料・美術資料を現地のフィールドワークによって確認しあるいは發見するという現在ならではの方法を、博引旁證というべき文獻消化蓄積のうえに立つて切れ味のよい判斷を下しつつ構築される明快な論旨に、みごとに有機的に結び附けたところにある。本章は、そうした點でも著者の眞骨頂を示している。従來、マニ教窟であると指摘されながら繪畫の解釋に依るばかりで決定的な根據に薄かったベゼクリクの第二五窟（本稿でも著者が主に使用するグリユンヴェーデル編號を用いる。）について現地調査を實施し、はじめてそのウイグル語銘文を讀み解き、壁畫解釋も深めながら、マニ教窟であることを證明した。慎重に過去の研究を分析しながら實證の手順を踏んでおり、十分に納得できる結論である。編年考察ののち、九一〇世紀頃の東部天山地方では、ウイグル支配下にあつて佛教とマニ教とは共存していたと推定するのである。

ところで、この第二五窟の構造はいわゆる二重窟であるが、類似的の窟や出土品などから、マニ教窟がベゼクリクに多く發見される可

能性を指摘している。この點については本稿の最後に觸れる。

【二〇頁】銘文③についての吉田一一〇頁の提案は十分検討に値する。もしそのとおりに「オチュケンの守護靈よ Kane Qutuy Tapnis Oya を守護し給え」と讀んでよいなら、後論もむしろ一貫したものにならう。

【二〇頁】銘文④の「(中略) M'///:」の部分、吉田の復元案 yazuqa の後は、:turmanun: つまり全體で「罪(のまゝ)」にとどまりませんように」と讀めそうである。

【二五―二六頁】生命樹についてはいくつもの繪解きの可能性があるが、その根元の圍いを光の國の領域である東・西・北の三界を示す、「とすれば當然、その圍いの中は闇の國ということになる」のだらうか。憶測にすぎないが、圍いの中が光・善の國で、直線で仕切られた南すなわち繪畫の下方が闇・死の領域と考えられないか。マニ教教義に疎い者の素朴な疑問である。

【二九―三〇頁】一九八〇―八一年に出現した一連の小洞窟群は著者も引用する吐魯番地區文物管理所(柳洪亮執筆)「柏孜克里克千佛洞遺址清理簡記」にいう八二・八三窟(記念窟)を含むものに違いないが、これには平面・断面圖(圖六、七)のほか、圖版肆一3に八二窟南壁畫に描かれた山、絡みあう樹木、鳥の部分の寫眞が載せられている。Geng/Klinkleit/Laut 1987 はこれをいうのである。もっとも柳はこの窟全體をマニ窟などではなく、佛僧の「影窟」とみている。評者の瞥見(一九八七年)では、奥室は白壁で、前室壁畫も確かに他のウイグル風佛教壁畫とは全く異なる雰囲気である。しかし、本書で明らかにされたり後述するようなセンギム・アグズの二重窟の裝飾と同類のものかどうかは壁畫崩壞が著しいた

めに判断しかねる。

第二章「トゥルファン出土マニ教寺院経営令規文書」

この文書は、本書がウイグル＝マニ教を歴史的に位置づけるために用いた基幹史料である。従来も注目されてきた本文書の最新の研究成果であり、言語学、マニ教の側面から現時点でほとんど餘すところのないほど徹底した解釋をおこなっているだけでなく、敦煌漢文史料にもとづく佛教寺院経営との比較類推など、四六―九六頁にわたる語註の毎頁のように知見・考察の輝きをみることができ。たとえば五一―五二頁のようにP三二四vの「官布・地子・柴草」との對比で *tatir, quanpu* を讀んだことなど。その後の一

二六頁までの語註索引・語彙索引も丁寧に作成されている。本章は、本書の展開からいえば第三章のいわば結論的考察を導き出すための史料確定にあたる部分であるが、これだけで獨立した論文となるべきものでもあって、その功績は大きい。なかでも特記すべきは、五九頁の敘述からもわかるように、本文書の八五行からの内容をそれ以前と切り離して理解し、本文書をマニ教寺院とウイグル王國の俗權力との關係を示すものとして讀み解いたことであり、歴史學研究の史料としての本文書の價值を飛躍的に増大し、定着させた。また、短時間とはいえ北京の歴史博物館で實物調査をおこなった良心的成果が、今後の研究のためにも發揮されている點（剽離「一部分の提示など」もみのがせない。八二―八六頁に引用の二つの文書掲載の意義については吉田一〇七頁のいうとおりである。いづれにせよ、憶測を極力排して、根據の求められる限りでの語註や解釋は嚴密である。それでもなお、いくつかのコメントだけを記

しておきたい。

【五八―五九頁】著者自身も示唆していることだが（八一、八三頁以下で「穀物」「主穀」の譯語を使う）、*tatir* を一元的に小麥 (*barley*) と同一視してよいかどうかは、多くの文書の編年にあわせて、なお今後の檢證が必要な問題でもあろう。言語の變遷という側面から評者も *qonq/qonaq* や *tür/yür*/etc. について言及したことがあるが、カーシュガリが *ügür, yügürün* をアラビア語の *duxun* (トウジンシハ *Pannisetum americanum* か?) とそれに似たものという (CDT, I, p. 100, II, pp. 150, 177) など、中央アジアの植物・穀物についてはなお研究の餘地がある。

【五九―六〇頁】テキスト二六―二八行の解釋について。tutuzun 「取るべし」とされているのは誰かを議論する際に、ここでは「幹事」を示しているが、森安自身が一二九頁で「マニ寺側でそれ（僧侶用の食料としての穀物類）を受け取る責任者は呼嚕喚である」といっている根據をここで明確に提示すべきであった。すなわち、テキスト第三〇行目の類推からすれば、破損で讀めない「取る」の主語は一見 *iki is ayruclar* 「兩幹事」が期待されるものの、テキスト三一―三四行の罰則規定との對應からも、破損スペースと破損部末尾の文字形から考えても、*bir koxan* 「(月番である)一人の呼嚕喚」と復元するのがふさわしい。森安も一二九頁ではそう考えたにちがいない。しかし、この箇所での行論が、文書發行者すなわち西ウイグル王國政府が、これらの食糧を誰に受け取らせるかを命令している文章かと考えての議論ではなく、穀物類を生産・供給すべき者を特定しようとする議論（それ自體は本文書解釋にとってキーポイントとなる）となったのでは、ツィーメの譯にまどわされた

ことになり、語註としては誤解を招く。

【七九頁、語註七一・七二】テキストの六八行と七二行の *yagmazun* 「干渉すべからず」を含む文章は、麵粉という食糧と、飲料類について慕闇や沸多誕が関わらないようにする對文であろうから、別解を用意する必要もなからう。次の如く考えるからである。

又、*yagmazun* を森安は二通りに譯し分けている。一二四行では「接近すべからず」という本来の意味にとるが、こと一二五行の計三箇所では「干渉すべからず」としている。評者はこの文書における *yag*・を原義に近い「接近する、觸れる、關與する」と一律に解釋できるだろうと考える。一方で *qatli* (八九頁、語註九四) は、強制的にものごとに關わるという意味で「干渉する」という日本語譯はふさわしい。テキストにおけるこの語の使い分けは本文書のなかで實は重要な意味を示唆するのではなからうか。すなわち同じく聖者たちに對する命令形で、この六八・七二行の *yagmazun* では食糧や飲料などの俗事に聖者たちは「關與する必要はない」こと、すなわち國家によるマニ敎敎義の尊重にもとづく聖者保護をいうのであり、九四行の *qatlimazun* では田地・園林・ブドウ園という俗權力が管理掌握しておくべきものに對して聖者たちは「干渉してはならない」としているのではないか。一二四・一二五行は、ともに保安官・地方官への命令として「關與すべからず」と同一譯で意味は十分にとおる(次次項参照)。本文書を「令規集」と命名し、それは一方で「本領安堵狀の性格を持」つものとして一三七頁で結論する森安の見解は正しいだろう。その兩側面をこの兩語の使い分けの解釋にもあてはめてみた次第である。

■【八〇頁、語註七七 a】*yjymis* を森安は一目瞭然で人名とする

が、「初釋」のように「總管」とするのは行き過ぎにしても、フスマやメロン、藥草・藥劑を集めておく役割をもつ役職稱號との考えは捨てきれないと思う。cf. ATG, § 442.

【九五―九六頁】テキスト二三―二五五行について。まず「僧衆」についての評者の假説。二〇―二三行でマニ寺で働けとされる人々の中にみえる俗人を町衆と考え、某トインという者たちを僧衆とみなしたらどうか。その僧衆は佛敎僧團を指すのであろう。刑の執行や訴訟にかかわる *yrtan* (判事? 森安は保安官と譯す) や *cupan* (郷長? 森安は地方官) は、町の非マニ敎徒や佛敎僧團の立場から (*argasintā*) 本マニ寺に關與してはならないという規定ではなからうか。ふを尊格とみることに賛成である。まさにマニ寺院保護規定である。かれらはマニ寺に直接屬さないが寺をとりまくケントすなわち街巷ないし周邊の郷村の環境(たとえば道路や生活廢棄物の問題)にまつわる問題であれば處理をし、他の用件に關與してはならない、としているのだと解釋してみたい。マニ敎寺院は、ウイグル權力の庇護のもとにあった時期であれ、俗人や先行の有力な佛敎社會の中にあつたことは疑いないと理解するからである。

第三章「西ウイグル王國におけるマニ敎の繁榮と衰退——マニ敎寺院經營令規文書の歴史的位置附け——」

本章で著者は、ウイグルマニ敎史全體の中では、トゥルファン出土關連史料の存在故に比較的光をあてられてきた西ウイグル王國におけるマニ敎の歴史的地位を、總轄的に議論し、明確に跡づけた。それは「令規文書」の的確な讀解・解釋の上に立って廣く西ウ

イグル王國全般の歴史事情に目を行きとどかせ、今後の中央アジア中世史研究のために大きな地歩を築くこととなった。

一箇所に捺された朱角印の印文から、この文書は西ウイグル國政府中樞から發布された公文書であるとしたうえで、發布される對象となったマニ寺を、高昌故城の遺跡Kと、それと一體の會計單位にあつた小マニ寺（遺跡αを含む高昌城内か、ベゼクリクかトヨク）と推定している。一二頁で指摘のあるように、ムルトウクや、とりわけセンギム・アグズの可能性をここに含めて考えるべきであることは、最後に言及するとおり。文書の性格についても、第二章までを讀んでくるならば、「建前上一切の經濟活動を許されないマニ教の寺院と僧侶に替り國家がその財政と經營面を擔當することを保證し、實務擔當の令規を定めると共に、從來當マニ寺が享受してきた諸特權を引き續き擁護していくことを宣言することになった」（一三七頁）との結論は評者にとつても理解しやすい。

「令規文書」の年代決定にも、森安一九七七、耿／張一九八〇などの先行論文を生かしながら、上限を一〇世紀はじめ頃とする。つづく一〇世紀から一一世紀にかけての西ウイグル王國の宗教事情に關する諸史料の檢證のうち、とりわけ高昌遺跡α出土といわれるM112裏のウイグル文書については、矢野道雄氏の助力とツィーメ氏の寄與を得ながら構築した、その新たな讀解と年代決定が貴重である。それによれば一〇世紀半ばにはマニ寺は健在であつたが、九八三年にはウイグル王權の命令のもとで佛教寺院が移轉したり、また（すぐ後には？）マニ寺が破壊されて佛寺にとつて替わられたりしているのである。森安によれば、M112と同じ場所から出土した佛教寺院建設の際に奉納された第一棒杭文書の年代一〇〇八年こそ

が遺跡αがマニ寺院から佛教寺院へと轉換した年である。他の棒杭文書は、九八三年にはセンギム地方にひとつ、一〇一九年にもひとつの佛教寺院がそれぞれ西ウイグルの王子夫妻と長史の肩書きをもつ人物によつて建設されたことを示し、マニ教の衰退は明らかである。一〇世紀半ばには中國への使節の中からマニ僧が消えて佛僧にかわるという漢文記録も整理しつつ、結局、マニ教寺院が國家の庇護を受けることを規定した「令規」文書の年代の下限は一〇世紀中葉と結論する。吉田一〇八頁の指摘にあるように、大筋への反論の餘地はないが、マニ教から佛教へとウイグル王權が信仰を變える過渡期のことについては未解明の課題である。

關係するイスラーム史料を、西ウイグル王國の事情を述べたものと位置づけて、西ウイグルマニ教史の有力な史料として使用可能であることを主張する。

結局、ウイグルマニ教は、一一世紀にはいつて急速に衰退したのであつた。

【一三九頁】カーシュガリー『トルコ語總覽』のイスタンブル寫本のカラーファクシミリ版が近年出版された。地圖を含め手元で容易に原文に接することができるようになった意義は大きい。

【一四二―一四三頁】西ウイグル王國時代以降のマニ教隆盛の「短期説」について。その説（マニ教は一〇世紀にはいると急速に衰えはじめたとの考え）では王延徳の『西州程記』を主な根據としている、と森安が言うのはやや誤解を招きやすい言い方である。いうまでもなく、王延徳は九八〇年代に高昌にマニ寺院が「嚴然と存在した」事實を記録しており、cf. と斷つてはいるものの註四〇の諸文獻は、それを誤讀して一〇世紀早々にマニ教が衰えたとしてい

Chotscho, Taf. 16. 上の稱號は一〇世紀後半の Miliz や一〇〇八年の第一棒杭などの稱號との對比ができそうである。森安は一八四頁で kol bilga tangri ilig (または xan) は西ウイグルの現國王を指す普遍的な美稱と考えている。かなり定型的な表現があるのは事實であるが、それらの組み合わせは必ずしも一様ではない。

【一八五頁】ハミ本『彌勒會見記』については伊斯拉菲尔・玉素甫、多魯坤・闕白尔、阿不都克由木・霍加『回鶻文彌勒會見記』一、烏魯木齊、一九八七年をビブリオグラフィに入れるべきである。これは今後の讀者のために。

附録二 京都大學文學部所藏 トゥルファン出土マニ教徒祈願文斷簡

附録三 北京圖書館所藏 敦煌出土マニ教僧手紙文斷簡(冬六一ウラ)

ソルミなど重要な地名や各種稱號が登場する祈願文と、手紙が必要な寫眞とともに公表された價值については吉田一〇九—一一〇頁を参照されたい。ともに詳細な語註が有益である。

引用文獻目録・略號表・索引も整備されていて使いやすい。また巻末には西ウイグル王國を中心とする全體地圖と、トゥルファン盆地とビシュバリクを含む地圖が折り込まれている。

こうして我々は、一〇世紀初頭から一〇世紀半ばに位置づけられた「令規文書」の分析によって、マニ教が西ウイグル國家の庇護のもとに繁榮している姿をはじめて明らかにすることができた。ついで一〇世紀末ころから一一世紀初めのウイグル王權による佛教受容と佛教徒の活動によってマニ教の運命は急速に落ち込み、ウイグル

佛教世界が成立する。その経過を今に残す史料が判明する限り餘すところなく研究され、ベゼクリク二五窟に典型的な二重窟の姿で眼前にあるのであった。ただ留意しておかなければならないのは、マニ教が西ウイグル王國住民のすべてに強制されたわけではなく、先行した佛教との共存の形で時をすごした点であろう。その中でこそ兩文化の混交がおこったことが具象的に論證されたことは、森安の大きな貢獻である。一九世紀末以來の出土品等から、トルキスタンは諸文明の坩堝と解説されてきた事實を、明確な事例をもって時系列に組み込んだからである。こうして明らかにされたマニ教をめぐる歴史事實を深めるための史料研究の一端は、すでに著者と吉田およびトゥルファン現地とともに進められており、その成果が期待される。當面はその大きな土臺が建設されたことを慶ぶものである。

最後に、西ウイグルのマニ教に關連する(ということは當然大潮流としてのウイグル佛教にも密接に關連する)遺跡について一言しておきたい。北京大學考古系の晁華山が『文物天地』一九九二—五に「火焰山下無名の摩尼古寺」(二六—二九頁)を發表し、その年末から翌年にかけて、中國の新聞に報道された、トゥルファン地區のマニ寺院遺跡の「發見」である。それらによれば、トゥルファンのベゼクリク千佛洞、センギム・アグズ(勝金口)、トヨク(吐峪溝)全體で七〇ほどのマニ教窟を確認したとのことである。遺跡の特定などについての情報が非常に曖昧なためここでの紹介は控えめにしなければならない。従來からの文獻によってマニ教窟であることが推測ないし確認可能な石窟の中で、本書の論證によってマニ教窟と確定されているベゼクリクの第二五窟(現三八窟)を除けば、マニ教窟である可能性が非常に高いのはセンギム・アグズのもので

あろう。それは實は Grünwedel 1906 の編號九、一〇を中心とする窟群⁽⁸⁾で、Oltendörff 1914 の圖版 XXXV-XLI にも明瞭なものである。第一〇窟（北寺第四窟）は、二重窟であること、壁畫の題材などから、本書で確認された實證事例を知る者ならば誰でもマニ教窟であることを疑わない性質を有している。もちろん森安も氣づいているにちがいない。晁華山はブライオリティに關しては樂天的に無頓着な中國の一部學界の癖として森安の名を出さないが、少なくともマニ教衰退の經過に關する年代論の論旨に本書の影響があるのは確かである。それにしても多くのマニ教窟の編年を試みている晁華山の調査・研究が、國家の重點科學研究の資金を獲得してドイツのアカデミー（具體的には不明）との共同調査をおこなうことになつたらしいことは、喜ばしいことである。森安が、本書で豫測してゐたようなトゥルファン地域でのマニ教窟の多量の再發見があつただけでも、今後の研究に大きく弾みがつたことになる。本書が手順として踏んだような純學問的考察が「新發見」の石窟にも加えられんことを望みたい。

以上、本書の本筋に必ずしも深くはかわらぬ些細なことも述べてきたが、評者の表現に不足のことがあればご寛恕願いたい。

註

- (1) 「森安孝夫著『回鶻摩尼教之研究』評介」として、『西域研究』總期第一三期、一九九四年一月、九九—一〇三頁に掲載されたので是非参照されたい。

- (2) これについては先にほぼ同文の柳洪亮「關於吐魯番柏孜柯里克新發現的影窟介紹」『敦煌研究』一九八六一、九九—

一〇二頁がある。

- (3) 實物調査の重要性はいうまでもないことであるが、ちなみにいうと、中國の博物館では一般にレブリカを作成し、なかには何の表示もなくそれを展示することがある。本文書も、一時期、末尾五四行分のレブリカが烏魯木齊の新疆維吾爾自治區博物館に展示されたことがあつた（⁽⁹⁾梅村一九九〇a、二九頁）。別の一文書（いわゆるビントゥン第三文書）のレブリカについても一言したが（同三一頁）、それがレブリカであることは一九九三年夏に同博物館から直接證言を得た。

なお、評者の調査（一九八七年六月二七日の、やはりごく短時間に合計二〇點ほど見ただけなので不十分であるが）によれば、本文書には本書三七頁に示される「總八七八二、T 八二・Y 九七四、K 七七〇九」のほかに「攷吐四、借二七九」という記號を記したカードが添附されている。これはトゥルファン出土（T、吐）で、もとは北京の考古研究所（攷）の所藏であつたことを示し、歴史博物館が借りたこと（借）を表している。一九五九年に新疆から集めたものには一般に「總」字が付されているが、本文書が北京と烏魯木齊の間をどのように往復して、いつレブリカが作られたかはなお不明である。⁽¹⁰⁾梅村坦「中國歷史博物館所藏『吐魯番考古記』所收回鶻文古文獻過眼錄」『中國歷史博物館館刊』一五・一六、一九九一年五月、一五七—一六三頁。

- (4) K 七七七文書のごく初歩的な讀解紹介は前註(3)の拙文に載せたが、當時マニ教について考えが及んでいなかったこ

とと原稿提出後二年以上たつて校正なしに突如刊行されたという事情から、もはや参照に耐えない。その寫眞(圖版五)印刷も残念ながら『吐魯番考古記』よりも悪い。

- (5) ㉔ 梅村「新疆の砂漠とオアシス」『東洋文庫書報』二三、一九九一年、三八—四〇頁。

- (6) Kâsarlı Mahmud, *Divânü Lügati't-Türk*, Kültür Bakanlığı yayınları/1205, Klasik Eserler Dizisi/11, Ankara, 1990, 320p.

- (7) 中國社會科學院考古研究所編著『北庭高昌回鶻佛寺壁畫』遼寧美術出版社、一九九〇年、圖七三。同『北庭高昌回鶻佛寺遺址』遼寧美術出版社、一九九一年、一四二頁。㉕ 中國社會科學院考古研究所新疆工作隊(孫秉根・孟凡人・陳戈執筆)「新疆吉木薩爾高昌回鶻佛寺遺址」『考古』一九八三—七、六二二頁。

- (8) 外見寫眞として Le Coq, Chotscho, Taf. 72-g, h, 73-d, e, f; H. G. Franz (ed.), *Kunst und Kultur Entlang der Seidenstrasse*, Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, Graz, 1986, Taf. 3, 表紙カバーなど参照。

- (9) 「火焰山下摩尼古寺の迷失與再發現」『科技日報』一九九二年二月二七日。

一九九一年八月 大阪 大阪大學文學部
(大阪大學文學部紀要 第三一・三二合併號)

B 5 判 iii + 本文二四八頁 + 圖版四四頁 + 地圖二葉

阿部洋著

中國近代學校史研究

——清末における近代學校制度の成立過程

中 島 勝 住

まず本書の著者である阿部洋氏のプロフィールから。氏は、一九九三年まで國立教育研究所においてアジア教育の調査・研究に従事し、その間に數多くの研究成果を残している。それにもまして注目すべきは、さまざまな中國教育にかんする共同研究のコーディネーターとして、中國研究あるいは教育史研究において、周邊領域と思考されている中國教育史研究のすそ野を廣げる役割を果たしてきたことである。現在活躍している中國教育研究者の多くが、阿部氏の共同研究の中から育ってきたことは、このことを如實に物語るものであろう。一九九三年四月には、研究の舞臺を東京から出身地の福岡縣に移し、福岡縣立大學においてあいかわらず多忙をきわめておられると聞く。

本書のことを、阿部氏は「近代教育の創始期というべき清朝末期、ことに二〇世紀初頭における中國教育近代化過程の構造特質を、教育普及の問題を中心テーマとして解明を試みたもので、筆者の近代東アジア教育史研究の成果の一部をなすものである」と説明している。

たしかに阿部氏は、中國だけではなく韓國を含めた東アジア全體をその研究對象とし、それに關する膨大な研究成果を世に問うてい